
11. 住まい手の生活を生かした京町家の再生

緋扇の会
(京都府京都市)

I. 活動の背景と目的

京都の伝統的木造住宅である京町家が急速に失われつつあり、その保全についての論議はここ数年高まる傾向にある。いくつかのグループが様々な角度から保全再生の問題に取り組んでおり、京町家に対する理解も広がっているが、当事者である町家居住者の存在が見えにくい。町家が抱える問題について居住者の意見が反映される場を作ることが、保全再生を進めていく上で重要な課題となる。様々な催しを通して相互の情報交換から、徐々にネットワークを広げていくことがこれらの活動の大きな力となると考える。今回の活動により作られていくネットワークから得られた情報を居住者、専門家などそれぞれの目でもう一度見直し、現在の生活、暮らしの中で京町家を考えていくことが必要と思われる。

京都の伝統的な暮らしが今のライフスタイルの中で、どの程度理解されるのか。それらが現在の暮らしの中に適応する部分、受け入れられない部分、それらの理由を皆で話し合い、伝統をふまえた新しい暮らしを考えることが、町家を再生するための核であり、それらがはっきりと見えてこない先達が培ってきた暮らしぶりを含めた京町家の再生はありえない。いくつかの町家をモデルにして、再生活用の提案を作ること考えた。

II. 活動内容

1. ネットワーク作りをはかる活動

居住者間の情報交換の場をつくり、それを核とした多様なネットワークをつくるために、様々なイベントをおこなった。

1) 建具替え (97年6月29日)

京都市内の大学生9人、一般人3人 合計12人が参加し、町家での建具替えのイベントを行なった。午前10時より、襖、障子を片付け、簾戸に替え簾筵を敷き詰める。それから、拭き掃除を行なう。この一連の作業を通して、町家の夏を涼しく過ごすための知恵、風を意識した町家の構造を参加者に実感していただいた。午後からは、廣川美子先生の「都市の室内で自然の風を感じる」(環境技術Vol.20 No7)をテキストに用いて、ご当主よりお話をうかがい、その後参加者全員にアンケートを行い、興味をひかれた点や感想を記入していただいた。最後にフリーディスカッションを行い町家に対する理解深めていただいた。

2) 町家を使った仮設ギャラリー (97年7月13~17日)

祇園祭にあわせて、ふだんはお店に使われている表の6畳間を仮設のギャラリーにしつらえた。壁面を生成の布、天井面を不織布で覆い、床には緞通を敷き詰める。照明はすべ

て間接照明とし、天井面と壁面全体が淡く光るようなしつらえとした。そこに現代アート（立体のオブジェ2点、石の彫刻1点）を祇園祭の4日間展示し、お祭に訪れる一般の人に見ていただけるような試みを行なう。そのうち一部の方にはアンケートを行ない感想をお聞きした。



町家を使った仮設ギャラリー



町家でお花を楽しむ

3) 町家の蔵を利用したお茶会（97年10月18日）

町家の蔵をピアノの練習スタジオとして利用できるように改装し、そこを利用して他の町家にお住まいの方々や、町家にかかわる建築家や工務店の方々のネットワークを広げる目的でお茶会を行なった。

参加者はお客様や準備の者を含めて合計24名、蔵の中でお茶をいただき、その後裏庭に仮設でしつらえたお茶室でお食事をいただいた。ろうそくの光に演出されたお庭を背景にお座敷や蔵、裏庭等思い思いの場所で夜がふけるまでお話しされていた。

4) 大阪ガス ディリパ京都 見学会（97年3月19日）

大阪ガス株式会社が京町家のリフォームモデルの見学を行なった。その設計や施工に関ったメンバーと共に新しい町家改修についての意見交換会を行なった。大阪ガスの方や、設計者、職人の方などそれぞれの立場から活発な議論が行なわれた。緋扇の会もリフォームモデルの企画段階から参加している。

5) 町家でお茶とお花を楽しむ（97年4月19日）

お茶とお花を楽しむ会を行なった。27名に参加していただき、いろいろな場所に置かれた花器にお花を生けていただき、その後、蔵でお茶を楽しんでいただいた。

お茶の後は、小島家当主小島正子氏のお話を聞いたり、新しくしつらえた照明で奥庭や通庭の夜の空間を楽しんでいただいた。

2. 京町家の再生・新しい活用方法および創造的な提案

緋扇の会と他のグループとの交流の中から発生してきた京町家の再生や新しい活用方法の提案をいくつか紹介する。

1) 祇園祭町会所をギャラリーとして活用

祭の時に飾り場となる以外には日常活用されず、建物に傷みが進む町会所を京都の伝統産業技術を生かした新しい感覚の作品を展示、販売するギャラリーとして常時、活用する。

お飾り場となる表家を改修し、中庭に蔵風の新しい棟を増築する。改修にあたっては金物による補強、腐蝕部の取替え、筋交の新設等の耐震補強を行ない、また手洗い、空調等の設備更新とともに増築部には軽食を提供する厨房設備を設けている。

2) 町家表家の店舗活用

以前は自営の店であった表家部分を新たなテナント店舗として活用する。家主は主家を住居とし、中庭より表の棟を、新しい感覚のケーキハウス、イタリアンレストランに改装。

表の外観は中二階の窓をパノラマ的な眺望を得る横長の全面ガラス戸にする以外ほぼ現状通りであるが、内部は天井板をはずしてダイナミックに小屋組を見せるなどの大胆な改装を行ない、若者にも受け入れられる雰囲気をつくりあげている。

多人数の利用、耐震性能も考慮して本格的な構造補強を行なっている。

3) 京都市の登録文化財町家の補修

隣接地の町家が取り壊されマンションに建て替るにあたり、今まで隠れていた建物側壁面の損傷部、また、マンション建設の振動等による地盤面の沈下等に対する補強、補修を行なう。基礎のコンクリート補強、腐蝕木材の取替え、壁面の焼杉板の張り替え、ケラバ瓦の補修等を行なう。文化財該当部の一部補修に関しては京都市及び京都府の助成金を活用した。

隣地との境界の関係で撤去の話があったケラバに関しては隣地側と交渉し、現状のまま残すことができた。

4) 一敷地の町家を表通りに面する二軒の町家として計画

一部横に張り出した形になっている二階建座敷部を奥に移築することにより、従来の建物を使用した町家と、その敷地残り部分に新たに造る二軒の町家として活用する。

従来部分の町家は京都の文化の発信を目的とする文化活動組織のオフィスとし、新築部分は持ち主の新たな住居として計画する。大きな敷地の適切な規模による活用を目指した計画であり、移築、新築部に関しては木の表情を見せながらの防火構造手法の検討が課題である。

5) 蔵を活用したスタジオ

町家の蔵をピアノの練習スタジオとして利用できるように改装する。古いものに手を入れ、音楽のための部屋として再生することによって、新しい町家の空間の活用を試みる。壁は土壁の補修を行い、在来の素材が現在にも十分に適応することを証明した。

蔵の中に作ったピアノの練習スタジオ
とお茶室



Ⅲ. 活動の効果と今後の課題

1) 活動の効果

京町家の持つ魅力を現代に活かすことが、保全再生を考える上で一番大切なことであるが、普段の生活者としての立場からは見えてこなかった魅力が新たに発見されたのは、京町家を体験する集いを通じた活動からである。町家の暮らしの問題点についての論議は多々あるが、楽しみ方を論議する場は少なかったように思う。今回の体験する集いを通して、今までに培われてきた町家の暮らしに対する理解は少し深まり、さらに新しい試みを受け入れる体制が出来てきた。参加したメンバーによる町家体験の次の企画も提案されつつある。また、町家居住者間のネットワークの広がりもこれらの集いを通して、つぎへの連携を促している。

町家での暮らし方、楽しみ方の提案が広がることにより、新しい町家居住希望者が徐々に生まれてきていることは事実である。そのことが町家が保全再生されるすべてに通じるとは思えないが、注目すべき事柄としてあげたい。昨年設立された京都市・景観まちづくりセンターには「町家に住んでみたいがどこに行けば見つかるのか」、「どうすれば町家が借りられるのか」といった問い合わせが増えてきている。我々の活動がすべてを担っているわけではないが、一助となっていることは考えられる。また、設備、耐震等、技術的な問題に関しても、専門家の知識を得ることによりおさなりにされていた部分が明らかになった。まだまだ試行錯誤の段階ではあるが、これらのことは今後の再生事例に反映されていくことと期待している。

2) 今後の課題

町家居住者の高齢化の問題はかなり深刻である。現在徐々に出来つつあるネットワークを世代交代をふまえた上で広げていくことが大きな課題として残る。同様に多くの建物の老朽化の問題がある。再生をしていく上での技術的な面については保全再生のシステムとともに整いつつあるが、建物が古くなっていくことを止めることはできない。居住者に大きくのしかかってくるのは、自分たちの高齢化と建物の老朽化である。建物を再生していくためにはかなりの費用負担をとらなければならない。個人のレベルで考えられることではないが、今後の大きな課題としてあえて記しておきたい。

また、新しい町家居住者を作っていくためには都心部のあいている町家を賃貸借をも考えの中に入れた活用方法があげられるが、賃貸借の問題はかなり複雑である。町家をもつ

と活用していくためにはこの部分の問題も解決していくことが大切なことである。不動産、法律の専門家の協力を期待したい。



京町家の庭と蔵